

## 女子高校生の夏季における飲み物の飲用実態

The actual consumption of drinks among  
high school girls and their consciousness in the summer

韓 順子, 谷 伊織

Soon-ja HAN, Iori TANI

キーワード：飲用実態，意識，愛知県，女子高校生，ペットボトル

Key Words : actual consumption of drinks, consciousness, barley tea made at home, high school girls, PET bottle

### 要約

2005年5月末から6月初めにかけて、愛知県県下の女子高校生160名を対象に飲み物の飲用実態に関するアンケート調査を行った。その結果、次のようなことが明らかになった。

1. 夏季の飲み物として愛知県の女子高校生に最も多く飲まれていたのは、煮出し麦茶だった。次いで多かったのがウーロン茶、ジュースだった。
2. 水は昼夕間以外では、水道水とペットボトルによる差は見られなかった。
3. 朝食時に牛乳を飲む割合が高かったが、就寝前にも比較的多く飲まれていた。
4. 緑茶は急須で入れた緑茶よりも、ペットボトルの緑茶のほうが多く飲まれていた。
5. 湯・玄米茶は、ほとんど飲まれていなかった。
6. 緑茶・コーヒー・紅茶・その他のなかでは緑茶が最も好まれていた。
7. 団欒時の飲み物として緑茶に対するイメージが最も多かった。
8. 家庭外では、ペットボトルの利用が多かったが、麦茶については煮出し麦茶が多かった。

### Abstract

In late May and early June 2005, I conducted a survey to gather information about the actual consumption of tea drinks among high school girls. I wanted to find out exactly what the girls were drinking. Altogether there were 160 respondents in the Nagoya area and the following trends became clear.

The most popular drink was barley tea made at home. Oolong tea and fruit juice came next. The results also showed that except during the afternoons, the girls drink about the same amounts of tap and bottled water. In addition many of them drunk

milk at breakfast and again in the evening before sleep. Another trend was that the girls rarely drink plain boiled water or Genmai tea. Green tea was also very popular. However green tea bought in PET bottle was more popular than tea made at home in a teapot. Most of the girls prefer green tea to coffee or black tea. It was also the drink they like to have when at home relaxing with their families. Away from home the survey showed that the girls drink many different kinds of bottled drinks. Many girls however made barley tea at home and then took it out with them in used PET bottles.

## 1. 緒言

平成16年に行われた国民栄養・健康調査の結果、メタボリックシンドローム（内臓脂肪症候群）が強く疑われる者と予備軍を併せた割合は、男女ともに40歳以上で最も高く、40～74歳における有症者人口は約940万人、予備軍者数の1,020万人を合わせると、およそ2,000万人いると推定されており、40～74歳では男性の2人に1人、女性では5人に1人がメタボリックシンドロームと考えられている（厚生労働省 平成16年国民健康・栄養調査）。メタボリックシンドロームと生活習慣との関連は高く、特に日頃の食習慣・飲習慣に起因するところが大きいことは周知の通りである。

また、加速する少子高齢化や生活習慣病の増大によって、国民医療費が32兆円（厚生労働省平成16年度国民医療費の概況）を越え、深刻な社会問題となっている現在、栄養教育・食教育の重要性があらためて認識されている。このような時代的背景を鑑み、平成17年7月には食育基本法が施行され、子どもへの食育を中心とした栄養施策が活発に進められている。

栄養指導・栄養教育を推進していく上で欠かせないのが、対象者の食事調査であるが、その中でどのような飲み物が飲まれているかについての研究は、あまりなされていない。これまでの先行研究において日常の飲み物には、地域や年齢階層別に差が見られることが明らかにされているが（早川ら、2004）、1988年と2000年に行った鹿児島県、阪神地域、滋賀県における女子大生の初冬の飲み物の実態調査（早川ら、2002）においては、およそ10年の間に3地域とも飲み物の飲用状況は変化しており、牛乳やコーヒーが減少した一方で、緑茶・麦茶・ウーロン茶の飲用が増加していることが報告されている。また、1992年に首都圏を中心に行った女子大生の飲み物調査では、緑茶の摂取量が、その両親の4分の1程度であることや、両親に比べると多種多様な飲み物を摂取する傾向にあることが明らかにされている（原田ら、1998）。その主な原因としてライフスタイルの変化やペットボトルの普及が考えられる。そこで本研究では、高校生の飲用実態を把握する上でペットボトル飲料の飲用状況も調査項目に加え、新しい知見を得ることを試みた。今回は、次世代の栄養教育の担い手である15～18歳代の女子高校生に焦点をあて、どのような飲み物が飲まれているか、その飲料摂取の実態を明らかにし、将来の望ましい飲食習慣形成に向けて栄養教

育のあり方を検討するための基礎資料とすることを目的とした。

## 2. 調査方法

(1) 調査対象および調査方法：愛知県下にある男女共学の私立高校2校に調査協力の依頼をし、そのうちの女子160名を対象に調査を行った。調査は2005年5月下旬から6月上旬にかけて実施した。アンケート用紙は授業中に配布し、その場で記入してもらい回収した。回収率は100%であった。分析対象は欠損値を含む回答者を除いた140名で、有効回答率は87.5%であった。

(2) 調査内容：アンケート項目は、飲用機会別に調査日の前日に飲んだ飲み物を複数回答させた。飲用機会は朝食時、朝昼間、昼食時、昼夕間、夕食時、就寝前とし、調査日の前日に飲んだ飲み物（何も飲まない、水（水道水）、水（ペットボトル）、湯、緑茶（急須で入れたもの）、緑茶（ペットボトル）、紅茶（葉茶）、紅茶（ペットボトル）、ウーロン茶、麦茶（煮出し）、麦茶（ペットボトル）、玄米茶、コーヒー（ドリップ）、コーヒー（インスタント）、牛乳、ジュース、炭酸飲料、乳酸飲料、健康飲料、その他）を回答させた<sup>1</sup>。ペットボトルの選択理由を、簡便さ、価格、味、その他から選ばせた。また、嗜好性に対する質問項目を設け、緑茶、紅茶、コーヒーの中から最も好きな飲み物を回答させた。さらに来客時、団欒時の飲み物に対する意識についても調査し、来客時と団欒時にそれぞれ緑茶、紅茶、コーヒー、その他の中からイメージするものを回答させた。今回、その他については、イメージするものがさまざまであるため分析から除外した。

(3) 集計および解析・検定方法：本調査データは、飲用機会別・飲用の有無であるため、ダミー変数を用いて量的データとして扱い、飲用機会と飲み物の種類による2元配置分析を行った。また、交互作用が見られた場合に下位検定(LSD法)を行った。分析は解析ソフトSPSS13.0J for Windows SPSS Base Systemを用いて行った。

## 3. 結果および考察

### (1) 飲み物の飲用実態に関する調査

一日の飲み物別飲用率を検討した。ここでの飲用率とは、全飲み物（何も飲まないも含む）の飲用回数に対する、ある飲み物の飲用回数（何も飲まないも含む）の割合を%で示したものである。一日の飲み物別飲用率について一元配置分散分析を行ったところ、飲み物の種類の主効果が有意であり ( $F(1,18)=21.60, p<.01$ )、飲み物の種類によって飲用状況が異なることが示された。Table 1に一日の飲み物別飲用率と下位検定(LSD法)の結果、Figure 1に一日の飲み物別飲用率(%)を示した。一日を通して煮出し麦茶の飲用率が最も高く、飲み物全体の20%近くを占めていた。次いでウーロン茶、ジュース、牛乳の順に高かった。湯、玄米茶はほとんど飲まれていなかった。これは調査時期が初夏であったため、温かい飲み物が敬遠されているためと考えられる。

Table 1 一日の飲み物別飲用率(%), および下位検定(LSD法)の結果

飲み物	飲用率	下位検定の結果
なし <sup>a</sup>	5.4	a>d,e,g,h,k,l,m,n,r a<ij,o,p
水(水道) <sup>b</sup>	6.0	b>d,e,g,h,k,l,m,n,q,r,s b<ij,o,p,
水(P) <sup>c</sup>	5.9	c>d,e,g,h,k,l,m,n,q,r,s c<ij,o,p
湯 <sup>d</sup>	0.0	d<a,b,c,d,e,f,g,h,i,j,k,l,m,n,o,p,q,r,s
緑茶(急須) <sup>e</sup>	2.8	e>d,l,m,n e<a,b,c,f,i,j,o,p,q
緑茶(P) <sup>f</sup>	5.6	f>d,e,g,h,k,l,m,n,r,s f<ij,o,p,
紅茶(葉茶) <sup>g</sup>	2.3	g>d,l,m g<a,b,c,f,h,i,j,k,o,p,q,s,
紅茶(P) <sup>h</sup>	3.1	h>d,g,l,m,n h<a,b,c,f,i,j,o,p,q
ウーロン茶 <sup>i</sup>	14.5	i>a,b,c,d,e,f,g,h,k,l,m,n,o,p,q,r,s i<j
麦茶(煮出し) <sup>j</sup>	18.6	j>a,b,c,d,e,f,g,h,i,k,l,m,n,o,p,q,r,s
麦茶(P) <sup>k</sup>	3.3	k>d,g,l,m,n k<a,b,c,f,i,j,o,p,q
玄米茶 <sup>l</sup>	0.7	l>d l<a,b,c,e,f,g,h,i,j,k,l,n,o,p,q,r,s
コーヒー(D) <sup>m</sup>	0.9	m>d m<a,b,c,e,f,g,h,i,j,k,n,o,p,q,r,s
コーヒー(I) <sup>n</sup>	1.9	n>d,l,m n<a,b,c,e,f,h,i,j,k,o,p,q,r,s
牛乳 <sup>o</sup>	7.2	o>a,b,c,d,e,f,g,h,k,l,m,n,q,r,s o<ij,p
ジュース <sup>p</sup>	11.0	p>a,b,c,d,e,f,g,h,k,l,m,n,o,q,r,s p<ij
炭酸飲料 <sup>q</sup>	4.9	q>d,e,g,h,k,l,m,n,r,s q<b,i,j,o,p,
乳酸飲料 <sup>r</sup>	2.7	r>d,l,m,n r<a,b,c,f,i,j,o,p,q
健康飲料 <sup>s</sup>	3.1	s>d,g,l,m,n s<a,b,c,f,i,j,o,p,q

平均値の差はいずれも.05水準で有意

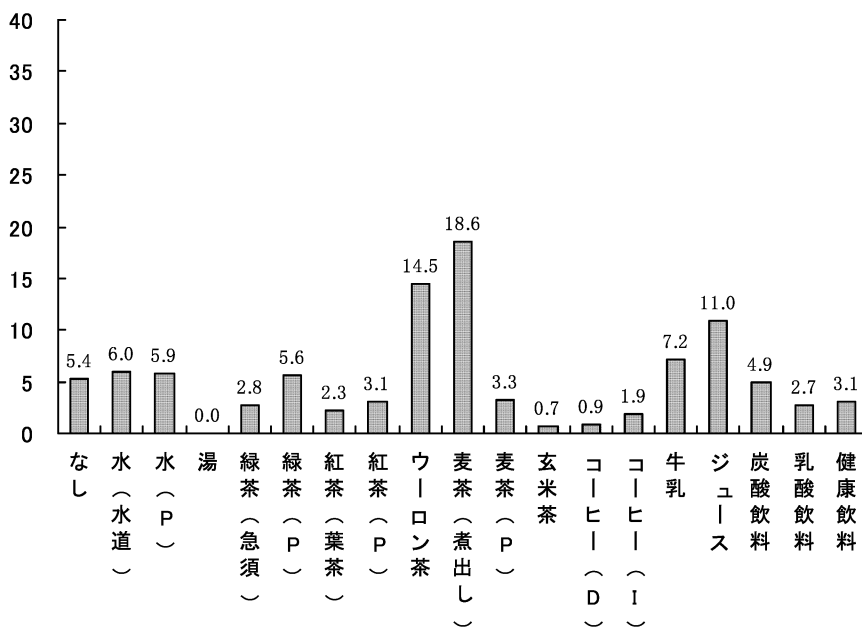


Figure 1 一日の飲み物別飲用率(%)

水については、水道水とペットボトルによる有意差は認められなかった。緑茶は、急須で煎れたものに比べてペットボトルによる飲用が有意に高かった。また、紅茶についてもペットボトルの方が飲用されていた。また、近年、実施された調査によると牛乳の消費低迷が顕在化し（社団法人 日本酪農乳牛協会 2006）、年間1人あたりの消費量が、ピーク時の34.7 l（1994年）から29.7 l（2005年）まで低下しており（農林水産省 2004）、特に中学校を卒業すると牛乳を飲む量が激減することが報告（2006 牛乳・乳製品の消費動向に関する調査）されている中で、牛乳は他の飲料と比べると多く飲まれている傾向にあった。その一方で若年層に多く飲まれていると考えられた炭酸飲料を飲んでいる割合が少なかった。

次に、飲用状況の違いを飲み物の種類、飲用機会別に検討した。飲み物の種類と飲用機会の2要因について、二元配置分散分析を行ったところ、飲み物の種類と飲用機会の交互作用が有意であり（ $F(2,90)=6.18, p<.01$ ）、飲用機会によって飲み物の種類に違いがあることが示唆された。そこで、飲用機会・種類ごとに単純主効果の検定を行うことにした<sup>2</sup>。

朝食時の単純主効果は有意であり（ $F(18,122)=20.98, p<.01$ ）、朝食時の飲用率を Figure 2、各時間帯における飲用率の下位検定（LSD法）の結果を Table 2 に示した。朝食時については煮出し麦茶の飲用率と牛乳が高く、続いてウーロン茶が高かった。水道水とペットボトルの水とは有意な差は認められなかった。また湯、紅茶（茶葉）、玄米茶は殆んど飲まれていなかった。これは調査時期が初夏ということもあり、全体としては、麦茶やウーロン茶といったさっぱりした味の冷たい飲み物が好まれる傾向であったと考えられる。また、牛乳の飲用率が比較的高い傾

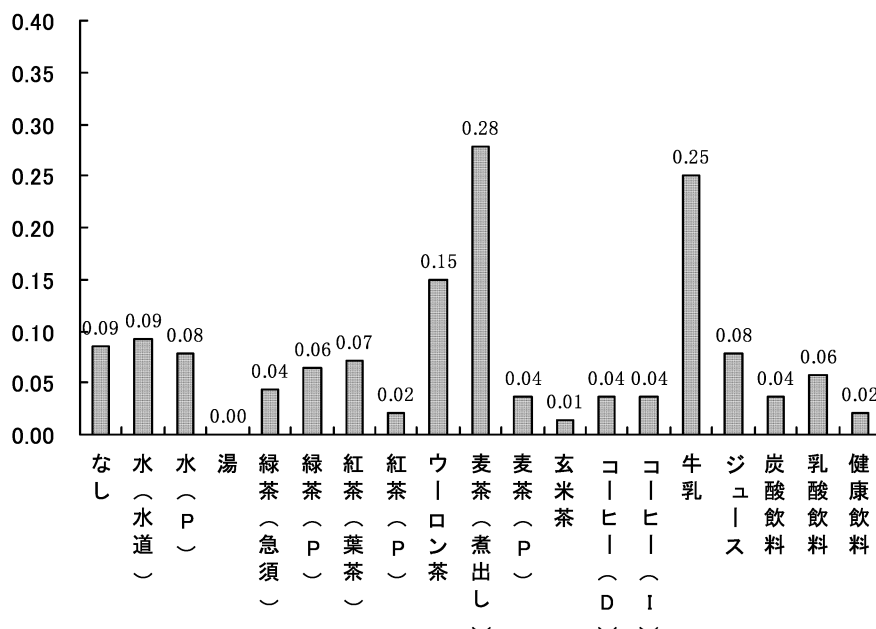


Figure 2 朝食時の飲み物別飲用率(%)

Table 2 各時間帯における飲用率の下位検定(LSD法)の結果

	朝食時	朝昼間	昼食時
なし <sup>a</sup>	a>d,h,l,s a<j,o	a>d,e,g,l,m,n,r a<i,j,p	a>d a<f,i,j,p
水(水道) <sup>b</sup>	b>d,h,l,q,s b<j,o	b>d,l,m,n b<i,j,p	b>d,l,m,n b<i,j,p
水(P) <sup>c</sup>	c>d,h,l,s c<i,j,o	c>d,l c<f,i,j,p	c>d,g,l,m,n,q,r c<i,j
湯 <sup>d</sup>	d<a,b,c,e,f,g,h,i,j,k,m,n,o,p,q,r	d<a,b,c,f,g,h,i,j,k,o,p,q,s	d<a,b,c,e,f,g,h,i,j,k,o,p,q,s
緑茶(急須) <sup>e</sup>	e>d e<i,j,o	e<a,f,h,i,j,p,q	e>d e<f,i,j,p
緑茶(P) <sup>f</sup>	f>d,l f<i,j,o	f>c,d,e,g,l,m,n,o,r f<i,j,p	f>a,d,e,g,l,m,n,o,q,r,s f<i,j
紅茶(葉茶) <sup>g</sup>	g>d,l g<i,j,o	g>d,l g<a,f,i,j,p	g<c,f,i,j,k,p
紅茶(P) <sup>h</sup>	h<a,b,c,i,j,o,p,	h>d,e,l,m,n,r h<i,j,p	h>d,l,m,n,r h<i,j,p
ウーロン茶 <sup>i</sup>	i>c,d,e,f,g,h,k,l,m,n,o,q,r,s i<j,o	i>a,b,c,d,e,f,g,h,k,l,m,n,o,q,r,s	i>a,b,c,d,e,f,g,h,k,l,m,n,o,q,r,s
麦茶(煮出し) <sup>j</sup>	j>a,b,c,d,e,f,g,h,i,k,l,m,n,p,q,r,s	j>a,b,c,d,e,f,g,h,k,l,m,n,o,q,r	j>a,b,c,d,f,g,h,k,l,m,n,o,q,r,s
麦茶(P) <sup>k</sup>	k>d k<i,j,o	k>d,l,m,n,r k<i,j,p	k>d,g,l,m,n,r k<i,j,p
玄米茶 <sup>l</sup>	l<a,b,c,f,g,i,j,o,p	l<a,b,c,f,g,h,i,j,k,o,p,q,s	l<b,c,f,h,i,j,k,p
コーヒー(D) <sup>m</sup>	m>d m<i,j,o	m<a,b,f,h,i,j,k,p,q,s	m<b,c,f,h,i,j,k,p
コーヒー(I) <sup>n</sup>	n>d n<i,j,o	n<a,b,f,h,i,j,k,p,q,s	n<b,c,f,h,i,j,k,p
牛乳 <sup>o</sup>	o>a,b,c,d,e,f,g,h,i,k,l,m,n,o,p,q,r,s	o>d,l o<f,i,j,p	o>d o<f,i,j,p
ジュース <sup>p</sup>	p>d,h,l,s p<j,o	p>a,b,c,d,e,f,g,h,k,l,m,n,o,q,r,s	p>a,b,d,e,g,h,k,l,m,n,o,p,q,r,s
炭酸飲料 <sup>q</sup>	q>d q<b,i,j,o	q>d,e,l,m,n,r q<i,j,p,	q>d q<c,f,i,j,p
乳酸飲料 <sup>r</sup>	r>d r<i,j,o	r<a,f,h,i,j,k,p,q	r<c,f,h,i,j,k,p
健康飲料 <sup>s</sup>	s<a,b,c,i,j,o,p	s>d,l,m,n s<i,j,p	s>d s<f,i,j,p
	屋夕間	夕食時	就寝前
なし <sup>a</sup>	a>d,l,m a<i,j,p,q	a<b,c,e,i,j,p	a>d,e,f,g,h,k,l,m,n,r,s
水(水道) <sup>b</sup>	b>d,e,g,l,m b<i,j,p,q	b>a,d,g,h,l,m,n,q,r,s b<i,j	b>d,e,g,h,k,l,m,n,r b<j
水(P) <sup>c</sup>	c>d,e,g,k,l,m c<i,j,p	c>a,d,g,h,k,l,m,n,q,r,s c<i,j	c>d,e,h,l,m,n c<j
湯 <sup>d</sup>	d<a,b,c,f,g,h,i,j,k,n,o,p,q,r,s	d<b,c,e,f,i,j,k,o,p	d<a,b,c,f,g,i,j,k,o,p,q,r,s,
緑茶(急須) <sup>e</sup>	e<b,c,h,i,j,n,o,p,q,r,s	e>a,d,g,h,k,l,m,n,q,r,s e<i,j	e<a,b,c,i,j,o,p,q
緑茶(P) <sup>f</sup>	f>d,l,m f<i,j,p,q	f>d,g,h,m,n,q,s f<i,j,	f>d,l f<a,i,j,
紅茶(葉茶) <sup>g</sup>	g>d g<b,c,i,j,o,p,q,s	g<b,c,e,f,i,j,k,o,p	g>d g<a,b,i,j,p
紅茶(P) <sup>h</sup>	h>d,e,l,m h<i,j,p,q	h<b,c,e,f,i,j,k,o,p	h<a,b,c,i,j,o,p,q
ウーロン茶 <sup>i</sup>	i>a,b,c,d,e,f,g,h,k,l,m,n,o,q,r,s i<p	i>a,b,c,d,e,f,g,h,k,l,m,n,o,p,q,r,s	i>d,e,f,g,h,k,l,m,n,r,s
麦茶(煮出し) <sup>j</sup>	j>a,b,c,d,e,f,g,h,k,l,m,n,o,r,s	j>a,b,c,d,e,f,g,h,k,l,m,n,o,p,q,r,s	j>b,c,d,e,f,g,h,k,l,m,n,o,p,q,r,s
麦茶(P) <sup>k</sup>	k>d k<c,i,j,o,p,q	k>d,g,h,m,n k<c,i,j,	k>d k<a,b,i,j,o,p,q
玄米茶 <sup>l</sup>	l<a,b,c,f,h,i,j,n,o,p,q,r,s	l<b,c,e,i,j	l<a,b,c,f,i,j,o,p,q,s
コーヒー(D) <sup>m</sup>	m<a,b,c,f,h,i,j,n,o,p,q,r,s	m<b,c,e,f,i,j,k,o,p	m<a,b,c,i,j,o,p,q
コーヒー(I) <sup>n</sup>	n>d,e,l,m n<i,j,p,q	n<b,c,e,f,i,j,k,o,p	n<a,b,c,i,j,o,p,q
牛乳 <sup>o</sup>	o>d,e,g,k,l,m o<i,j,p	o>d,g,h,m,n,q,s o<i,j	o>d,e,h,k,l,m,n,r o<j
ジュース <sup>p</sup>	p>a,b,c,d,e,f,g,h,i,k,l,m,n,o,q,r,s	p>a,d,g,h,m,n,q,r,s p<i,j	p>d,e,g,h,k,l,m,n,r p<j
炭酸飲料 <sup>q</sup>	q>a,b,d,e,f,g,h,k,l,m,n,r,s q<p	q<b,c,e,f,i,j,o,p	q>d,e,h,k,l,m,n,r q<j
乳酸飲料 <sup>r</sup>	r>d,e,l,m r<i,j,p,q	r<b,c,e,i,j,p	r>d r<a,b,i,j,o,p,q
健康飲料 <sup>s</sup>	s>d,e,g,l,m s<i,j,p,q	s<b,c,e,f,i,j,o,p	s>d,l s<a,i,j

平均値の差はいずれも.05水準で有意

向にあったことが主な特徴として挙げられた。この結果は、年齢階層別に行った他の調査結果（早川ら，2003）と比べても高い飲用率を示しており、今後、さらに地域間の比較を行う必要があると思われる。

昼朝間の単純主効果は有意であり ( $F(17,123)=17.02, p<.01$ )、朝昼間の飲用率を Figure 3 に示した。朝昼間においては、煮出し麦茶およびウーロン茶、ジュースの飲用率が高かった。またペットボトルの利用は、緑茶と紅茶については、茶葉よりも有意に高かった。

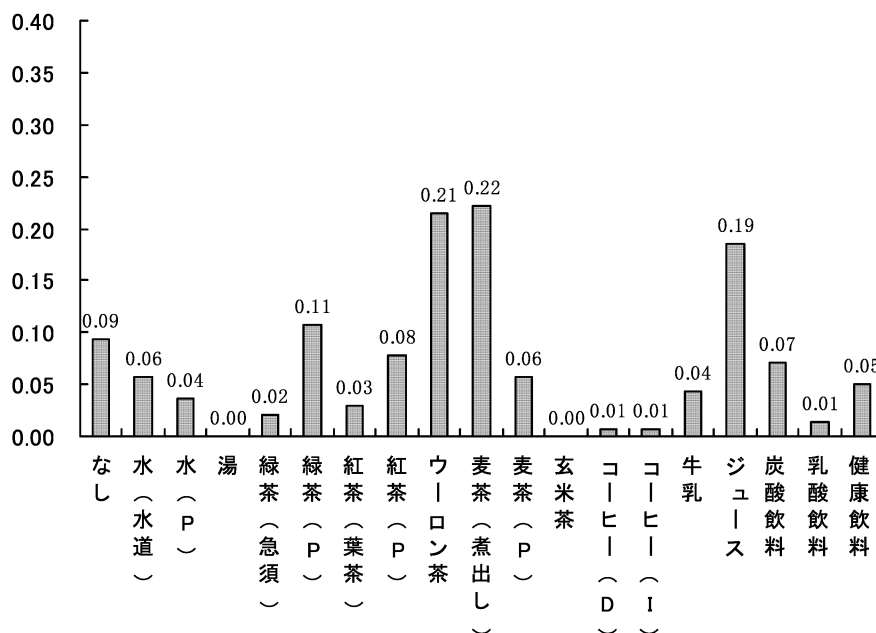


Figure 3 朝昼間の飲み物別飲用率(%)

昼食時の単純主効果は有意であり ( $F(18,122)=26.17, p<.01$ )、昼食時の飲用状況を Figure 4 に示した。ここでは煮出し麦茶およびウーロン茶を中心に多く飲まれていた。次いでジュース、緑茶（ペットボトル）の順であった。昼食時では朝昼間と同様の傾向が見られた。

昼夕間の単純主効果は有意であり ( $F(18,122)=19.16, p<.01$ )、昼夕間の飲用状況を Figure 5 に示した。昼夕間においては、ジュースが他の飲み物に比べて有意に多く飲まれていた。次に煮出し麦茶やウーロン茶が多く飲まれていた。また一日を通してこの時間帯に炭酸飲料が比較的多く飲まれていた。これは、放課後の部活動や下校時にジュースや炭酸飲料などの甘味飲料が好まれる傾向にあるためと推察された。また牛乳も比較的多く飲まれていた。牛乳摂取は成長期にある高校生にとって必要な飲み物であるという意識が根付いていることが推察された。

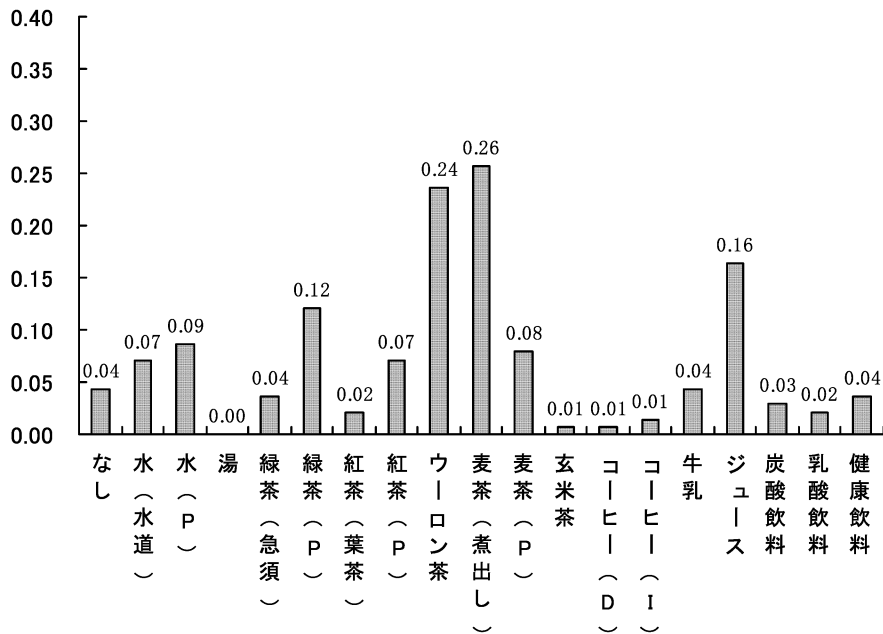


Figure 4 昼食時の飲み物別飲用率(%)

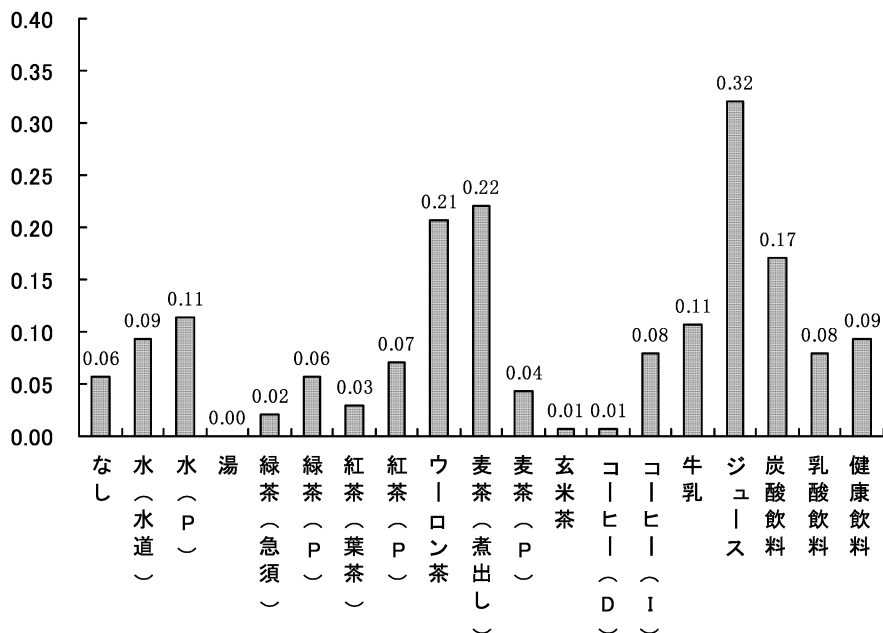


Figure 5 昼夕間の飲み物別飲用率(%)

夕食時の単純主効果は有意であり ( $F(14,126)=29.45, p<.01$ ), 夕食時の飲用状況を Figure 6 に示した。夕食時は, 有意に煮出し麦茶とウーロン茶が多く飲まれていた。またペットボトルの緑茶と急須で入れた緑茶は, 有意差は見られなかったが, いずれも他の飲み物に比べ多く飲まれ



ており、夕食の団欒時においてもペットボトルの利用が進んでいることが示唆された。緑茶を良く飲んでいる年齢層を明らかにした早川らの調査(2003)では、年齢層が高くなるに従い緑茶の飲用率は高くなり、逆に年齢が若くなるほど緑茶を飲んでいないことが報告されているが、本研究の結果では比較的多く飲まれていた。コーヒー・紅茶は全く飲まれていなかった。

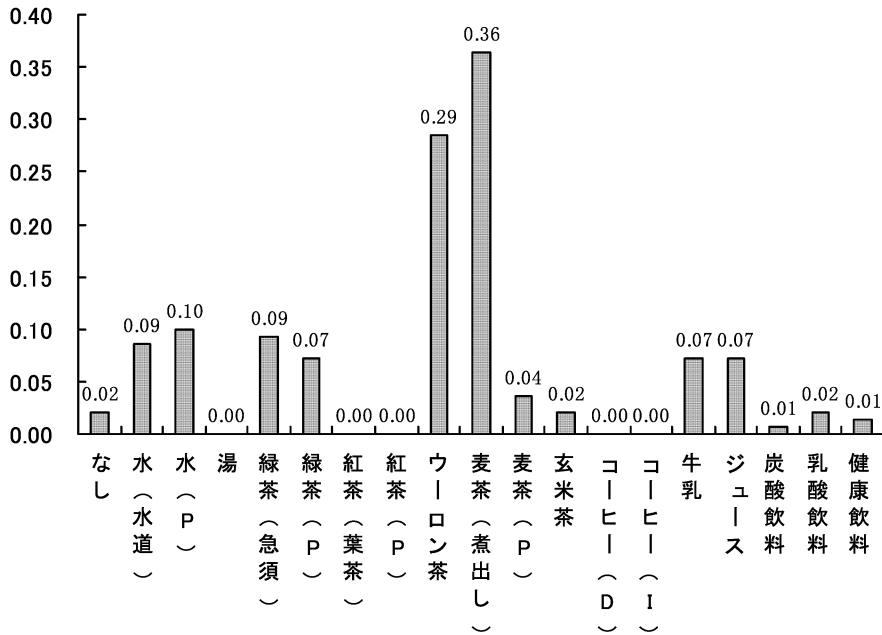


Figure 6 夕食時の飲み物別飲用率(%)

就寝前の単純主効果は有意であり ( $F(18,122)=16.44, p<.01$ ), 就寝前の飲用状況を Figure 7 に示した。就寝前の飲み物として最も多く飲まれていたのが煮出し麦茶だった。次に多かったのがウーロン茶だったが、この傾向はすべての飲用機会ごとに同様の結果が得られた。ジュース・炭酸飲料などの嗜好飲料や牛乳も比較的多く飲まれていた。就寝前の牛乳は、高齢者に多く飲まれており若年層には、あまり飲まれていないことが報告(早川ら, 2003)されているが、本研究においてはよく飲まれていた。

次に「飲まない」については、時間の単純主効果が有意であり ( $F(5,135)=4.57, p<.01$ ), 時間帯ごとの「飲まない」の選択率と下位検定(LSD法)の結果を Table 3 に示した。夕食時、昼食時は「飲まない」が比較的少ないが、就寝前や朝昼間には「飲まない」が比較的多く見られた。夕食時に何も飲まないと答えた者の割合は少なく、何らかの飲み物を飲んでいて。これは中高年層に比べ若年層に何も飲まない者の割合が多いという先行調査(早川ら, 2003)の結果と異なる傾向だった。

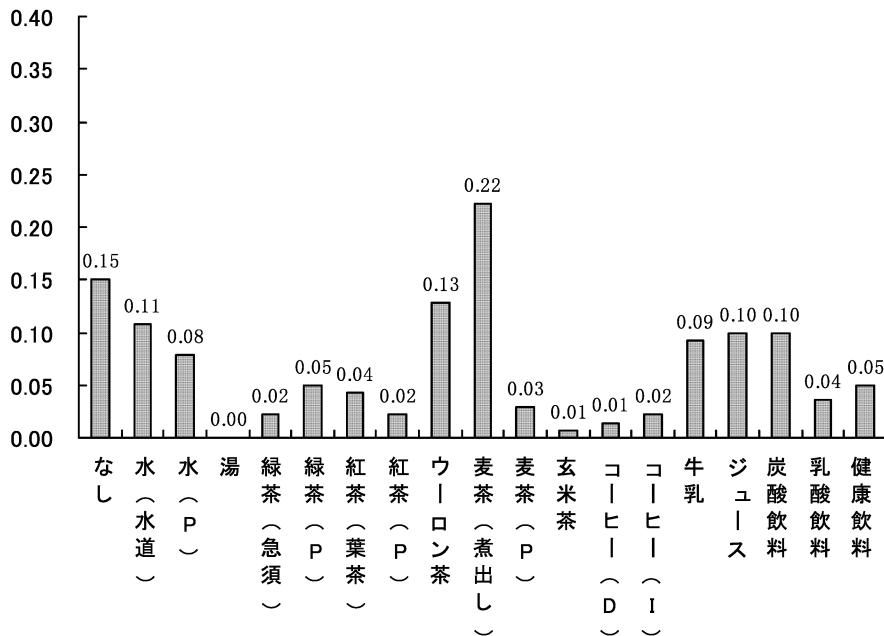


Figure 7 就寝前の飲み物別飲用率(%)

Table 3 時間帯ごとの「飲まない」の選択率(%), および下位検定(LSD法)の結果

飲み物	飲用率	下位検定の結果
朝食 <sup>a</sup>	8.6	a>e
朝昼間 <sup>b</sup>	9.3	b>c,e
昼食時 <sup>c</sup>	4.3	c<b,f
昼夕間 <sup>d</sup>	5.7	d<f
夕食時 <sup>e</sup>	2.1	e<a,b,f
就寝前 <sup>f</sup>	15.0	f>c,d,e

平均値の差はいずれも.05水準で有意

## (2) 嗜好性に関する調査

## 1) ペットボトルの選択理由

ペットボトルを選んだ理由について、Table 4 に示した。その結果、約75%が「簡便性」と答え最も多かった。次いで「価格」が挙げられ「味」はほとんどなかった。その他の意見として「安全性」が挙げられたが、わずかだった。

	簡便さ	味	価格
嗜好理由	74.6	2.8	22.5

Table 4 ペットボトルの嗜好性(%)

## 2) 嗜好性

日常的な飲み物としてよく飲まれている緑茶・紅茶・コーヒーの中から好きなものを選ばせた。その結果、緑茶が最も好まれていた。一方、コーヒー・紅茶を選んだ者が少なく、高校生世代には、あまり好まれていなかった。

## 3) 団欒時および来客時

団欒時および来客時の飲み物をイメージさせた。嗜好性を含めた結果を Figure 8 に示した。団欒時の飲み物として緑茶が好まれていた。これは、団欒時の飲み物として緑茶が最も好まれていたこれまでの研究結果（早川ら、2002; 2003; 2004）と一致した結果となった。来客時には、緑茶がやや多かったものの紅茶もほぼ同じ割合で好まれていた。緑茶は古くから飲まれてきた日本の伝統的な飲み物であり、団欒時の飲み物として、世代を超えて最も多く好まれていることが明らかとなった。

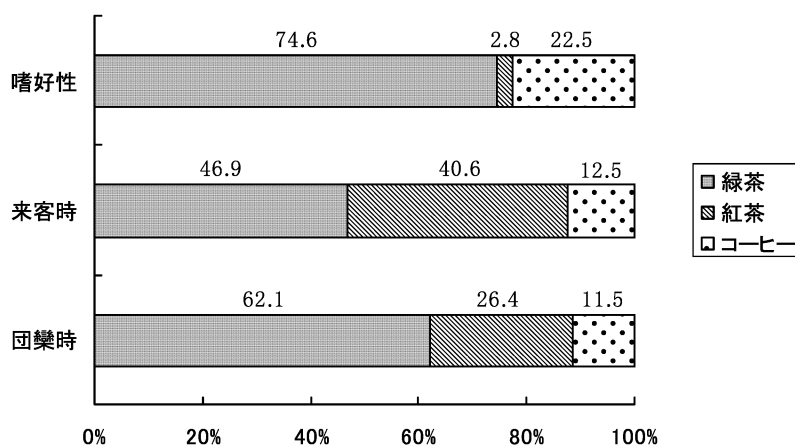


Figure 8 団欒時および来客時の飲み物のイメージと嗜好性(%)

## 4. 結論

本研究から次のような知見が得られた。1) 夏季の飲み物として多く飲まれていたのは煮出し麦茶だった。2) 水については水道水とペットボトルによる差は見られなかった。3) 家庭の外にいる時間帯でも煮出し麦茶が多く飲まれており、その理由として魔法瓶やペットボトルに入れたものを携帯して飲用しているものと考えられた。4) 緑茶については、ペットボトルの方が急須で入れたお茶よりもよく飲まれている傾向にあった。5) 対象とした女子高校生は朝食時・昼夕間・就寝前において牛乳を飲む割合が比較的高く、好ましい傾向にあることが見受けられた。6) 嗜好調査においては、緑茶が最も好まれており、7) 団欒時の飲み物として緑茶に対するイメージが最も多かった。

しかし、本研究では対象集団が2校に限られたため、今後対象施設を増やし、地域差、学年差、男女差などを検討することが必要と思われる。また飲用実態を調査する上で、ペットボトルと他の飲用方法を分けて検討を行ったが、純粹に飲み物だけについて検討するためには、ペットボトルとそれ以外の飲用方法を合算した分析や検討も必要であると思われた。調査項目についても、ウーロン茶のペットボトルを追加するなどカテゴリを作成する上で十分な検討がなされていない点についても今後の検討課題としたい。さらに今回は、時間帯ごとの飲み物の種類について調査を行ったが、飲用量や食事の内容も併せて検討していくことが望まれた。

## 5. 引用文献

- 1) 社団法人日本酪農乳業協会データベース 2006 牛乳・乳製品の消費動向に関する調査  
<http://www.j-milk.jp/>
- 2) 農林水産統計 平成17年 牛乳乳製品統計調査(基礎調査)結果の概要 2006
- 3) 原田まつ子・関口紀子・加藤栄子・東愛子・斉藤禮子・下川千代子・五十嵐益恵・福島敏子・三石禮子・高木廣文 1997. 親子の飲行動に関する一考察—女子大生とその両親—. 日本食生活学会誌, 8, 48-59.
- 4) 原田まつ子 2000. 親子の飲行動に関する一考察—女子(中学・高校生・大学生)とその両親—. 日本食生活学会誌, 10, 14-25.
- 5) 早川史子・前田昭子・野呂祐子・南幸・日比喜子・田村義保 2002. 女子学生の飲み物の飲用状況と意識の地域別10年間の比較. 日本食生活学会誌, 13, 174-182.
- 6) 早川史子・前田昭子・南幸・田村義和 2003. 女子の緑茶の飲用実態と意識の年齢階層別比較. 日本食生活学会誌, 14, 56-60.
- 7) 早川史子・前田昭子・岡崎章子・石津陽子・猪口智子・南幸・中森正代・田村義保 2004. 阪神地区における女子の飲行動の年齢階層別比較. 日本食生活学会誌, 15, 210-215.

### 【脚注】

- 1 表および図中では、ペットボトルをP、ドリップをD、インスタントをIと表記する。
- 2 飲み物の種類ごとの検討は、その時間帯の飲用量に影響を受けやすいことを考慮し、ここでは行わない。

### 謝辞

本稿を作成するにあたり、ご指導いただいた滋賀県立大学大学院の早川史子教授に厚くお礼申し上げます。また、調査に快くご協力下さいました高校の先生並びに生徒の皆様にも心よりお礼申し上げます。